

黒バック・二人キャスト限定ショートドラマ

劇団黒バック

第一回 「ぶつかる」

(30分弱想定)

脚本 大岡俊彦

#1 可能性

パラレルワールドの自分と会ってしまった。しかし顔も職業も全然違う。二人の分岐点は、カノジヨの「私と仕事、どっちが大事なの？」への答えであった。

#2 フェチ

放課後ひまな高校生。好きな子あてようぜ。しかしことごとく好みが食い違い：

#3 盤外戦

人工知能に挑む将棋名人。控室に来た人工知能サイドのマネージャーは、妻を人質にしたとやってきた。八百長をしろという。

● オープニング

● タイトル『ぶつかる#1 フェチ』

○ 渋谷 1

渋谷の喧騒。人々の足音、話し声。サラリーマンのA、ケータイで謝っている。

A 「ハイ、ハイ。ほんとすいません。すぐ資料まとめて送ります。得意に送るの、十四時でいいんですよね？ …… 確認用に、十三時先に送り…ます。ハイ。いそぎます。間もなく」

一方、自由業のB、道に迷っている。

B 「あれー？ ここスクランブル交差点でいいんだよな？ あっちが109だし、交番こっちだし…あれー？ なにあのビル？」

A 「ハイ、失礼します（通話を切り、スマホを見始めながら歩き出す）」

B 「あっちか？」

互いに互いを見てなくて、ぶつかる。

A、B 「うわ！」

タイトル『ぶつかる#1 闇の中でも微笑んで』

はずみでAのポケットから定期入れが落ちる。B、拾う。

B 「すいません、よそ見してて…」

A 「こっちこそすいません、スマホ見せて…」

B 「落ちましたよ（定期入れを渡す）」

A 「すいません」

B 「（名前を見て）アレ？」

A 「？」

B 「沼田沼男。…珍しくないですかこの名前？」

A 「あ。ヘンテコな名前だ」

B 「いやいや、実はオレも沼田沼男なん

ですよ」

A 「は？」

B 「珍しくない？ だってそんな名前の
同姓同名が出会うなんてありえないっし
よ！」

A 「まあ：たしかに」

B 「あ、スイマセンついでに沼田沼男。

東急の階段探してるんだけど」

A 「呼び捨てかい」

B 「他人と思えなくて（笑）」

A 「東急はそっち（下を指して）」

B 「？ 地下は半蔵門線でしょ」

A 「地下になったでしょ」

B 「嘘だよ。なってないよ。山手線の廊
下行ってこう上がって：アレ？ ここも変
だよ：」

A 「？」

B 「そうだ！ そうなんだよ！ 渋谷が
変なんだよ！ 助けてくれよ！」

○渋谷2

二人、歩きながら。

A 「：つまり、東急は地下化してない、
ヒカリエはなくてまだパンテオンが現役
で」

B 「こっちではAKBは解散してないっ
ても驚きだよ。あと東北の震災が起きた
ってのも信じられない」

A 「：記憶違いじゃなくて？」

B 「今日は二〇一七年の×月×日」

A 「日付はあってる」

B 「：パラレルワールド？ オレ、パラ
レルワールドの渋谷に迷い込んだ？ それ
が一番説明がつく」

A 「パラレルワールドって」

B 「そうでしょ！ オレの世界では地震
はなかったし、東京オリンピックもないし、
スマホはもっと進化して、アイフォンは次
13だよ？」

A 「まじで？」
B 「大体なんか変な光を通り抜けてさ、あそこに戻ればオレは元の世界に帰れて……」

A 「オイ沼田沼男」
B 「……なんだ沼田沼男」
A 「まさかだけど……お前は、パラルワールドのオレ？」
B 「……だいぶ、見た目は違うけど」
A 「東京生まれ、○○年○月○日、○○座、A型」
B 「○○幼稚園、○○小学校○○中学、○○高校、一浪して○○大、○○会社入社」
A 「両親は沼蔵と沼子、初恋は○○、好きなアイドルは○○」
二人 「……マジかよ！ やっぱオレかよ！」
B 「握手を求めろ。A、疑問。」
A 「人間の生き方って顔に出るらしいじゃん。渋谷の見た目も違うんだろ？ 顔もだいぶ変わるのかな」
B 「で、嫁は範子で」
A 「……いや？」
B 「は？」
A 「それって川田範子か？」
B 「そうだよ。生涯最高の恋だった範子」
A 「別れた」
B 「なんでだよ！」
A 「……お前、まさか範子と結婚してるのか！」

B 「そうだよ」
A 「……仕事は？」
B 「会社辞めて、色々やってる」
A 「色々？」
B 「花屋とか、ネット販売とか、アクセスリープロデュースとか」
A 「は？」
B 「お前は逆に、会社にまだいるのか」
A 「上司はまだ亀田」
B 「……辞めちまえよ、そんな会社」
A 「なんでだよ。なんでお前は範子と別

れずに済んだんだよ」
B 「…範子と、付き合いはしたんだよな？」
A 「六本木の合コン」
B 「そこまでは一緒」
A 「帰りのタクシーで酔ってディープキス」
B 「うん」
A 「で、吐いた」
B 「一緒だ」
A 「で、何でか付き合うことになり」
B 「…そこまでは、オレとお前は同一人物だったのかも知れん。いつ別れた」
A 「二十五のとき」
B 「なんで？」
A 「大喧嘩して…」
B 「オレはしてないな。その前は？」
A 「なんだっけ。亀田の指示で、資料作成が立て込んで」
B 「亀田の資料作成な！ あれ意味ねえよな！」
A 「…で、クリスマスの日…」
B 「そこまでは一緒だな。それで範子に切られたろ？ 『仕事と私とどっちが大切なの？』って」
A 「あ（気づく）」
B 「…（気づく）」
A 「オレ、仕事って言った」
B 「オレ、お前って言った」
二人 「…そこか…」
B 「…じゃ、そのあと、亀田の下でずっと仕事か」
A 「範子を取って会社を辞めたのか」
B 「おう。派遣やったりコンビニやったり、でも今は三児のパパだぜ？ お前は？」
A 「…」
B 「なんだよ」
A 「あの日からずっと同じだ。まだ使いない資料を集めて、作って、得意に送る。今日も十三時チェック」

B 「一時間前に見て、直させる気だな？」
 A 「亀田だからな」
 B 「：何年同じことやってんだよ。やめちゃまえよそんな仕事。オレは辞めて済々したぜ。『お前と生きていく』、それが男としての幸せだろ。なんで『仕事と私とどっちが大切な？』に、仕事、なんて言ったんだよ？」
 A 「：お前、会社入ったとき、夢はなんだって言った？」
 B 「世界を動かすデカイ仕事がしてえ。：って、お前も同じか」
 A 「目の前にあることを、ひとつひとつこなして行ったら、その先にそれがあると、思ってたんだよ。思ってたかった。：範子はそれまで待ってくれなかった」
 B 「：デカイこと、まだ叶えてねえんだな？ まだ小間使いやらされて」
 A 「なんだよ！ お前の方が全然幸せじゃねえか！ ふざけんなよ！（掴みかか）る」
 B 「ふざけるも何も、お前はそっちを選んで、オレはこっちを選んだんだ。それだけだろ」
 A 「ずるいよ！ パラレルワールド、入れ替えようよ！」
 B 「はあ？」
 A 「オレもお前もオレだろ！ 十分楽しんでろ！ 入れ替わろう！」
 B 「何言ってるの？ ：あ！ あの光のゲート！」
 二人の前に、光のゲートが。
 B 「あそこから出てきて：」
 A 「（走り出す）」
 B 「待てよ！（止める）」
 二人、もみあう。A、先に入る。
 光のゲート、消えてしまう。

○もうひとつの渋谷

A、ゲートから出てくる。
あたりを見回して。

A 「たしかに：東急はまだ地上走ってるし、ヒカリエもない。あの看板：AKB解散して、みんなソロなんだ：オリンピックは、シंगाポールか：」

と、向こうから来たCにぶつかる。
その男は先ほどのBとそっくり(二役)。

C 「あれー？ あ、すいません」

A 「お前：沼田沼男！」

C 「え、なんで知ってんですか！」

A 「オレを追って来たのか！」

C 「違いますよ！ 初対面でしょ！ なのに何で：」

× × ×

A 「まさか更にもうひとつのパラレルワールドから来た沼田沼男で：」

C 「しかも『この服とこの服、どっちがいい？』って聞かれた所が分岐点とは：」

A 「仕事と私、どっちが大切なの？」

C 「お前」

A 「この服とこの服、どっちがいい？」

C 「こっち(一方を指す)」

A 「：じゃアイツは、こっち(逆を指す)って言った奴なんだな：？」

C 「：そうみたいだな。いか。世の中は可能性に満ちているんだ。どれを選ぶかは自分次第で、その一寸先は闇で、しかも自己責任なんだ」

A 「：聞いた風なことを」

C 「で、範子と喧嘩してんだよ今。この世界の奴ってのは、幸せそうにやっていたらどろ？」

A 「ああ」

C 「無限のオレの可能性の中で、一番成功した選択をした男か：」

A 「：そのようだな」

A 「ふと腕時計を見る。」

A 「やっべ、資料をまとめなきゃ！」

C 「そいつと入れ替わるんじゃないかった

のかよ」

A 「あ、そつか。(考えて、決意) …でも
いいや。アイツにもお前にも出来なかった、
世界を動かすデカイことをしに帰ってや
る」

C 「は？」

A 「…なんか、自分に負けてんのが腹立
ってきた。他のオレが成功してんだから、
オレに成功できない訳ねえだろ」

A、スタスタと歩き出す。

○元の渋谷、ゲート前

待っているB。

光のゲートが現れ、Aが帰還。

B 「あ！ お前！ このゲートは一人専
用ってことか！ これで元の世界に帰れ
る！」

A 「いいよ。帰れよ」

B 「？」

A 「『服はこっち』って迷ってるオレがい
るから、助けてやれ」

B 「??」

A 「可能性なんだ。どっちか行ったらど
っちかになるけど、どっち行っても幸せに
なる可能性も、権利もあるだろ」

B 「??？」

A、電話する。

A 「ああ、資料ですが、前回のと同じで
いいですか。僕が責任をもって得意先に説
明します。細かい資料を直すより、ちゃん
と話をしにいきましょう」

B 「…お前、よく亀田にそんなこと言い
返せたな」

A 「…お前に、会ったからかな」

B 「なんだそれ」

A 「ついでに。(もう一件電話) …あ、範
子、…久しぶり。いや。えっとさ。お前と
仕事、両方取ることにしたから、やり直し
たい。…ついでに結婚して、三児をもうけ

たい。ハア？何言ってるの？って感じでしよ。あ、じゃ、かけ直して」

電話を切るA。

A B 「…」

A B 「…」

A、B、笑う。

B 「ガンバレ沼田沼男」

A 「ガンバレ沼田沼男」

B 「一寸先は闇だぞ」

A B 「お前もな」

A に電話がかかってくる。

A 「ああ、範子。え？ 今から服買いに行くって？ じゃ付き合うよそれに。…で、どうせ『この服とこの服、どっちがいい？』って聞くんだろ？」

にやりと笑う二人。

暗転。

●タイトル『ぶつかる#2 フェチ』

○教室、放課後

A 暇な高校生二人。机の上とかに座って。
「お前さ、クラスに好きな女とかいる？」

B 「いる」

A 「マジで！ 誰？」

B 「何でお前に言わなきゃいけないんだよ。お前はどうかんだよ」

A 「いるよ」

B 「誰だよ」

A 「…待て。当てっこしよう」

B 「…おう。…その子のどこがいいんだよ？」

A 「おっぱいだな。推定D、いやFかも。あのプルンプルンのおっぱい。おっぱいこそフェロモン。おっぱいこそ王道。あーあのおっぱいに顔をうずめてみてえええ」

B 「お前何にも分かってねえな。女は胸
じゃねえだろ」
A 「は？」
B 「脚だろ。スラリと長い脚が、組ん
だり組まれなかったりする、あのラインの美
しさこそが女の魅力ってもんだろ」
A 「：お前、脚フェチ？」
B 「お前はおっぱいフェチか」
A 「そうだよ！ おっぱいにも色々あ
んだよ！ 釣鐘型、ロケット型、半球型。そ
の中でもアイツのおっぱいは最高なんだ
よ！」
B 「おっぱいはどうでもいいよ。脚だろ。
膝の裏とかふくらはぎとか綺麗な女なんて、
滅多にいねえぞ！」
A 「：待て。お前、女を外見で見てるだ
けだろ」
B 「お前こそ」
A 「女は内面だろ。アイツ、優しいんだ
よ。愛想よくて。そこが好き」
B 「優しいのは媚びてるだけだぞ。俺の
好きな女は、プライドが高いんだ。それっ
て責任感があるってことだ。そこがいいん
だよ」
A 「優しさだろ」
B 「責任感だよ」
A 「：あと、ファッションセンスがいい
んだよな。私服がうわーってなる女いるじ
ゃん」
B 「それは分かる。センスが合う合わな
いは大事だ」
A 「はじめて意見があったな」
B 「でも服より笑いのセンスだろ。ヘン
な所で笑う女は引くだろ」
A 「服だろ」
B 「笑いだろ」
A 「：大体、そんな女、いたか？ 誰？」
B 「お前の好きな女こそ、誰だよ？」
A 「何部？」
B 「陸上部」

A 「? :俺の好きな女も陸上部」
B 「待って待って。ウチのクラスの陸上部の女、三人しかいないじゃん。誰? 相沢? 榎本?」

A 「(首を振る)」
二人同時に「お前、原田が好きなの?」

A 「:」

B 「:」

A 「待ってよお前、原田のおっぱい最高だろ」
B 「何言ってるんだよ、原田の脚が最高だろ」

B 「優しいところだろ」
A 「責任感あるところだろ」

B 「ファッション」

A 「笑い」

B 「:」

A 「:」

B 「:」

二人同時に「お前一体どこ見てんだよ!」

暗転。

●タイトル『ぶつかる#3 盤外戦』

○控え室

名人A、待機中。

ノックして入ってきた敵のマネージャー

ーB。

B 「どうも」

A 「何?」

B 「永世名人に直接ご挨拶を、と思いついて。このたびウチの最強人工知能『オメガ』との対戦、お受け頂いて有難うございます。マネージャーの高橋です(名刺を出す)」

A 「(受け取る):なにせ、人類の名誉の為だからね」

B 「ウチのオメガ、ことごとく王将も竜

王も破ってしまいました。あとは永世名人ただ一人。『人工知能は人間の将棋に勝てるのか？』その答えがようやく出るときが来て、我々研究者も光栄ですよ」

A 「…私は、人間の為に指すんだよ。人工知能の方が人間より賢いなんて、人間として認めたくはないんでね」

B 「演算速度。記憶容量。定石の効率化。ディープラーニングによる強化学習。オメガは将棋誕生以来二千年だとして、今まで人類全員が指したすべての対局より多いであろう局面を経験しています。なにせ一日十萬戦指して、もう十年も演算をぶん回してますからね」

A 「…そのうち人類は不要って判断して、核ミサイルをハッキングするのかわ？」

B 「ははは。オメガは将棋専用マシンなので、そういう学習には最適化されてません」

A 「…では、盤上で」

B、帰りかけるが振り向く。

B 「ひとつ、提案があるのですが」

A 「？」

B 「率直に言います。この対局、負けてもらえませんか？」

A 「…何言ってるんだ。人類最後の希望だぞ俺は。負けたら天地をひっくり返す騒ぎになるだろ」

B 「そこですよ。我々は、そこで三戦勝負を宣言します。二戦目は負けますので、三戦目をしましょう。三戦目が、今日やる予定の、本気の勝負にすればいい」

A 「…八百長か」

B 「ちがいますよ。世間が盛り上がる為ですよ。この中継には莫大な金が動いているんだ。三戦やれば、三倍儲かるでしょ？」

A 「…」

B 「ギヤラを、山分けしましょうよ。むしろ二戦分で、こっちの取り分は一戦分にします」

A 「…そっちのメリットは？」
B 「その後の商売です。一回でも名人に勝った。二回勝てばさらに良し。どっちに転んでも、その後の商売に有利になる」
A 「断る」
B 「どうして？」
A 「そちらが三戦勝負にする保証がない。この勝負で勝ち逃げをするかも知れない」
B 「…流石、先読みしますね」
A 「…それに、俺は人類の名誉の為にやる。金の為ではない」
B 「誓約書、用意してます（出す）」
A 「八百長にそんなもの無効だろ」
B 「…流石、読んでますね」
A 「将棋の読みより浅いだろ」
B 「では、どうでしょう？ あなたの個人情報をネットに流すという、脅迫なら？」
A 「…盤外戦を、仕掛けるのか」
B 「ははは。正攻法じゃ、無理そうなので」
A 「…残念だが、俺はツイッターもフェイスブックもやらん。ネットに触れてないので、検索しても出てこんぞ」
B 「…そこまでは、こちらも読んでます。だから、子供の頃の悪行をばらしてやるうかと思って」
A 「は？」
B 「小学校のとき、ボール投げてガラス割ったでしょ」
A 「…子供のすることだ。そういうこともある。そうやってボールを投げるのを覚えてるんだ。それにあやまつて、和解もした」
B 「中学校の頃、うまい棒を万引き」
A 「時効」
B 「…大学の頃、酷い振り方をして、彼女を傷つけた」
A 「俺も傷ついた。恋愛とは、そういうエゴとエゴのぶつかり合いだ。そういう修羅場を経て、人は成長するのだ」
B 「では、将来ある若き棋士を、王将戦

でことごとく潰したことは？」

A 「将棋指しとしてむしろ名譽」

B 「歌舞伎町で酔って立小便」

A 「ズボンの中に漏らす方が不名譽」

B 「…流石ですね」

A 「ここまで、読めてたか？」

B 「…もちろん、読んでました。だから、まだ奥の手があります」

A 「？」

B 「奥さんと子供を、誘拐させてもらいました」

A 「なんだと？」

B 「ひまわり幼稚園のお出迎えを狙わせてもらいましたよ？」

A 「バカな！ 公表してないぞ！ どうして特定したんだ！ …いや、ハッターだろう。妻と子供の画像は出回ってないだろう？」

B 「奥さんのママ友のフェイスブックに、写ってましたので」

A 「…そこから漏れたのか？」

B 「人質です。負けて頂ければ解放します。やくざじゃないんで殺しも暴力もないです。誓約書も渡しますし、三戦勝負にするだけです。お金も支払いますので、口外無用という事で。あと、これは録画も録音もされていません」

A 「…わかった。…そこまでは、読めていなかったよ？」

B 「では、よろしくお願いします」

B 「一礼して廊下に出る。」

B 「電話をかける。」

B 「ああ私だ。うまくいったよ。流石将棋指し。読みが深くて、最後の切り札まで行って焦ったよ。だがこちらの計画が上回ったな。人工知能の立てた計画は、完璧だった。さすが我らがオメガ」

A 「そのまま去ってゆく。」

A 「控え室に残されたA、電話をかける。」

A 「ああ、無事か？ そうか。予想通り、

引っかかったよ。偽の役者さんは大変だろうが、やくざ絡みじゃなくて良かった。君の友達にも、嘘写真のご協力ありがとうと言っておいてくれ。読みよりも、驚く芝居のほうが難しかったよ。：ああ。人工智能がこういう計画を立てて来るところまでは読めた。：ははは。人工智能を信じる人間を騙すほうが、簡単だからね。：：ああ。勿論、一戦で潰す」

暗転。

● エンディング

黒バック・二人キャスト限定ショートドラマ

劇団黒バック

第二回 「待った」

(30分弱想定)

脚本 大岡俊彦

#1 幻

「待った？」と待ち合わせに来た男。しかしその相手は見えていない。架空の存在を恋人に思っている……？

#2 百万光年の旅

百万光年のかなたへ向かう宇宙船。冷凍睡眠で眠っている間につくはずだった。しかし、途中で起きてしまう……

#3 盲目の恋

事故で視力を失ったカメラマン。生きる気力がないと思いきや、夢に現れる美女に恋をしたという。彼の親友にその女を探してくれないかと頼む。見えない男の夢の中の美女を、どうやって探すのか。

● オープニング

● タイトル『待った #1 幻』

○ 待ち合わせ場所

B、時計を見ながら人を待っている。
なかなか来ない。

A、走って現れる。

A 「待った？」

Bの横に、架空の女がいる想定で、話し始める。

A 「ゴメンゴメン。超急いで来たんだけどさ、電車でなんと痴漢が捕まってさ！俺、目の前で『この人です！』って言うの初めて見たよ！それで電車が遅れて……。怒ってる？ あ、今日の服、似合ってるね！水色やっぱ合うよ。髪もちよっと色抜いたっしょ。その方がいいよ。うん。春だしね。そうだよ、春だよ」

B 「…（不思議そうに、ちらちら見る）」
A 「（続けて）映画までまだ時間あるから、お茶でもする？ あ、メガネあるよね？じゃあ後ろの席でもいっつか。でも俺前の方の席が迫力があって好きなんだけどなあ……」

B 「…（さらにじっと見る）」

A 「（気づいて）…何？」

B 「…」

A 「何だよ。ケンカ売ってるの？」

B 「いや。そうじゃなくて。…あの、誰と話してるんですか？」

A 「…は？」

B 「誰と、話してるんですか？」

A 「彼女に決まってるじゃん。（彼女に）いや、この人なんかオカシイよ。行こう」
B 「僕には、その人が見えないんですけど」

A 「は？」

B 「あなたが何もない空間に向かって話

してるように見えるんですが」

A 「…ちよつと、何言ってるの？ いるでしょ！ ここに、俺の彼女が！ ちよつと引っ込み思案で、でも結構カワイイ、マイハニーが！」

B 「(首を振る)」

A 「彼女に失礼だろ！ 結構気にしてるんだぞ、地味だってこと。だから髪の色も抜いたし、明るい水色の服着たり、彼女なりに努力してるのに」

B 「…いや。見えないです」

A 「明るい水色のスカートが似合ってる、ショートカットが本田翼みたいで。(彼女に) あ、そのポーチ買ったの？ 似合ってる。(Bに) この白いポーチとかも？」

B 「はい」

A 「…おかしいな」

B 「おかしいのはそっちでしょう。あなたは、見えない幽霊と付き合ってるんですか？」

A 「変なこと言うなよ」

B 「…彼女とは、どこで出会ったんですか？」

A 「は？」

B 「彼女と」

A 「…ああ。合コンだよ。会社の面子で開いた。そこで知り合ったときに、彼女、映画とか本とか好きで、それで盛り上がって、音楽の趣味もマンガの趣味も合ってた。彼女、こっそりマンガ描いてるんだって。でも見せてくれねえんだよ。下手だからっていまだに」

B 「それで」

A 「俺が黒髪ロングが好きだって言ってるのに、『似合うと思って』って急に茶髪のショートにしてきやがんの。でもそれで似合ってたんだよ。このかわいい髪も見えないって？」

B 「はい。出会って、どうなったんですか？」

A 「温泉も行った。海も行った。俺ら、ドライブ好きでさ。函館行ったときも車借りて、雪景色の中走ったりしたんだ。山の展望台までドライブして、百万ドルの夜景見て、『キレイ』でもお前のほうがキレイだぜ』なんてベタなことやったり：」

B 「で」

A 「：でも彼女、病気だったんだ。でも重たいやつじゃない。子宮筋腫。今どき、四人に一人はかかる可能性があるんだって。それ知らなくて、俺一人が右往左往して、えー子宮取っちゃうのってビビってうろたえて、でも全部取るわけじゃないって聞いて、安心して、良かったー赤ちゃん産めるんだーって、え、俺の赤ちゃん？ なんて言ったりして。：（彼女に）ゴメン、こんなこと他人に言っただけ」

B 「：ちよつと、彼女さんが見えてきました」

A 「ホントか？」

B 「なんだろう。事情みたいなのが見えてきたからかな」

A 「：な、いるだろ？」

B 「いる！ いるかも！」

A 「な？」

B 「：（目をこする）：やっぱりいない気がする」

A 「いない：」

B 「ホラ！」

と、手で「彼女」の空間を切る。

B 「ホラホラホラ！」

さらに三回切る。

B 「今の、あなたにどう見えたんですか？」

A 「巧みに、こう、よけたように見えた」
腰を引いたり、しゃがんだり、尻を出したり、不自然なポーズ。

B 「そんなバカな。じゃこれは！」
どうやってもよけられないように、何度も切る。

A 「こう、見え、た」
 伏せたり、開脚跳びでよけたり、バク
 転したりの、派手なアクションで全部
 よける。

A 「…(息切れ)…」
 B 「…」
 A 「…やっぱり…俺の妄想なんだな？」
 B 「…合コンっていつの合コンですか？」
 A 「…それが覚えていないんだ」
 B 「温泉ってどこの温泉？ 海ってどこ
 の海？」
 A 「温泉につかったよ。海は真っ青でキ
 レイだった」
 B 「どこの温泉と海？」
 A 「…(思い出せない)」
 B 「函館はドライブで登ったって言いま
 したよね？ 冬季の道路は閉鎖してる筈で
 すよ」
 A 「…やっぱり…俺の妄想なのか…」
 B 「…」
 A 「薄々感づいてはいたんだよ。俺に彼
 女なんて出来る訳ないって。こんなダメで
 モテない俺が自分とピツタリな、ちよつと
 地味だけどモデル並のステキな彼女が出来
 るなんてさ。上手い話だと思つたよ。そう
 さ。俺は会社でも落ちこぼれて、上司から
 も取引先からも嫌われてるダメなやつさ。
 モテないし、友達もない。社会的落伍者
 で、おまけにエア彼女もちって、もう病氣
 じゃねえか」
 B 「…病氣でもなんでもいいんですよ。
 あなたの心がそれで安定していて、社会生
 活を全うできてれば」
 A 「俺の日常生活があまりにも辛くて、
 これは俺自身を作り出した『幻』だと。俺
 は『幻』に癒されてるって」
 B 「…そうやって、自分自身を守ってる
 のかも知れません」
 A 「…」
 B 「…」

A 「(彼女に向かって)何？ 何で別れた
いなんて言うんだよ？」

必死に彼女に懇願する。

A 「なんで？ 俺の何が悪かったんだ
よ！ お前はここにいろよ！ 映画の時間
が来ちゃうよ！ …なんで？ なんてそう
いうこと言うの？」

B 「…彼女は、なんて」

A 「俺の人生がもうすぐうまく行くから
って。私の役割は終わったからって言うん
だ。そんな！ 俺を一人にしないでくれ
よ！ ねえ、どこいくの！ なんか幽霊み
たいに消えてかないでよ！ ねえ！ お前
が必要なんだよ俺！」

A、その場にへたりこんでしまう。

A 「…」

Aのケータイに着信。

A 「ハイ。…え？ 入選？ …俺の作品
が？ ハイ、ありがとうございます。ハイ、
また連絡します！」

B 「？」

A 「俺が彼女と描いたマンガが入選した
んだって！ これで俺の人生が開けてく
る！ 会社も辞めてやるぜ！ ありがと
う！ この瞬間にたまたま居合わせてくれ
た、偶然のあなた！ 幸せを分けてあげよ
う！ ありがとう！ じゃ、早速みんなに
連絡しなきゃ！」

はげしくBに握手を求め、友人に電話
しながらAは去ってゆく。

B 「…」

一人残されたB、最初と同じように人
を待つ。

「架空の女」がやって来た。

B 「ううん。待ってない待ってない。…
今日のその服、似合ってるね」

暗転。

●タイトル『待った #2 百万光年の旅』

○宇宙船、内

船内服の二人。

A 「さあ、いよいよこの宇宙船は亜光速に入り、アルファベータ星への百万光年の旅が始まる」

B 「ワクワクするな」

A 「ああ」

B 「でも不安だ」

A 「そりゃそうだ。我々人類はそんな遠くまで行ったことがない。光速で行っても百万年かかる距離への冒険だからな」

B 「帰ったら、二百万年たっているわけか」

A 「そうだな」

B 「向こうの滞在期間は一月だろうけどさ、百万年行って、百万年戻って、二百万年か」

A 「しようがない。他の星系探索隊の奴らも似たようなもんさ。人類はこうやって発展していくんだ。これでもハイパードライブ発明前は、光速より何倍もかかったんだぜ？ ハイパードライブ様々じゃないか」

B 「それでも片道百万年かあ」

A 「百万光年だからな。(後ろのカプセルへ移動)それで、このカプセルでワールドスリープする訳だ。ちよつと寝て、百万年後に起きれば、まあちよつと遠足に行くよなもんさ」

B 「そりゃ分るけどさ」

A 「…何？」

B 「…遠足前は、ワクワクするよな？」

A 「? : おう」

B 二人、カプセルに入る。

A 「じゃあ、おやすみ」

B 「おやすみ」

暗転。

明転。

B、起きてしまおう。

B 「…あー、やっぱり。…起きちゃったよ…」

A、スヤスヤ寝ている。

B 「オレ遠足の前の日とか、全然寝られないタイプなんだよなあ…。コールドスリープでもやっぱそうだとは…」

B、しようがなく起き上がる。

B 「…トイレに起きたことにしよう」

トイレ(下手)に行って戻って来る。

Aを覗きこんで。

B 「よく寝てんな。起こすのも悪いしな。

無理やり寝るか。おやすみ！」

暗転。

明転。

今度はBが寝ているのに、Aだけ起きる。

A 「あー…。こいつが遠足の前とか言うから、起きちゃったじゃんよお。百万年寝てなきゃいけないってのにさあ。…とりあえずトイレ行っとくか」

トイレ行って、戻って来る。

A 「…」

暇なので、走ったり、ストレッチしたりする。

A 「…百万年起きてるわけにいかねえしな…。寝るか！」

暗転。

明転。

同様に、Bだけ起きる。

B 「また起きちゃったよ…。眠りが浅いのかね…」

トイレ行って戻って来る。Aの寝顔を覗きこんだり、ストレッチしたり。

B 「…」

思いついて、運転席(上手)に行き、

チェスのボードを持ってくる。
一手打ち、寝る。
暗転。
明転。

A だけ起きる。
A 「ん？ あ」

チェスの一手目に気づく。

A 「お前やっぱどっかで起きてんな？
寝ろよ。ていうか、俺が起きると思って、
こいつ持ってきたのか？ …面白え。やろ
うぜ。どうせ百万年の旅なんだ」

二手目を打ち、寝る。
暗転。
明転。

B 「…」
次の手を打つ。

暗転。
明転。

A 「…」
次の手を打つ。既に複雑な局面に。

暗転。
明転。

B、長考中。
B 「待った！」
と手を出す。

B 「…といっても、お前は寝てるよな。
起こす訳にもいかねえし…」

B こっそり相手の駒を動かすが、やめる。
B 「いや、流石にばれるな。うーん、ど
うしよう…」

立って、色々考える。

B 「あ！ ハイパードライブ！」
運転席（上手）へ行く。

B 「どうせ百万光年も行くんだ。一光年
戻ったってバレねえだろ。一手分巻き戻し
だ」

暗転。
明転。

A 「待った！ …と言っても、お前は寝てるのか。…どうしよう…待てよ！ ハイ パードライブで一光年分戻れば…！」

暗転。
明転。

B、悩み中。簡素な局面。
長い暗転。
明転。

寝ている二人。Bだけ起きる。
(チェス盤はない)

B 「また起きちゃったよ…。眠りが浅いのかね…」

トイレ行って戻って来る。Aの寝顔を覗きこんだり、ストレッチしたり。

B 「…」
思いついて、運転席(上手)に行き、チェスのボードを持ってくる。
一手目を打つ。

暗転。

●タイトル『待った #3 盲目の恋』

○病室

ベッドの上に起き上がっているA。
目に包帯が巻いてある。

B、やって来てノックをしようとする。

A 「よう。今日は早いな」

B 「何で俺って分った？」

A 「足音でなんとなく分るようになってきた」

B 「そうか。(入ってくる)体はまだ痛むか？」

A 「いてえ。トレーラーに巻き込まれた
んだぜ俺？ よく生きてるよ」
B 「半年で治るのか？」
A 「医者がそう言うんだから、治るだろ。
…治っても、仕事復帰は無理だろうな」
B 「まだ、眼球の移植できる可能性だっ
て…」
A 「角膜移植だって難しいって」
B 「…」
A 「カメラマンが、目を失っちゃ、おし
まいだよ」
B 「…」
A 「体ゆっくり治してから、次の仕事考
えるわ。せつかく生き残ったんだ。神様は
なんかやれって言ってるんだろ」
B 「…思ったより、落ち込んでねえんだ
な」
A 「ああ（にやりと笑う）」
B 「…なんだ？」
A 「聞いてくれるか」
B 「なに？」
A 「恋を、したんだ」
B 「はあ？ 流石スケベカメラマン。看
護婦さんとかか」
A 「ちげーよ」
B 「じゃ何？」
A 「夢の中に、毎回現れる美女にさ」
B 「…？」
A 「すっごい美人なんだ。俺、カメラマ
ンなりにさ、色んなモデルや女優撮ってき
たけど、そんなの吹っ飛ばすぐらいの、と
んでもない美女だよ」
B 「はあ」
A 「そのコが夢に出てきて、微笑むのさ。
俺はそのコに恋をしたんだ」
B 「…毎回、同じ顔なのか？」
A 「俺のスケベっぷりを知ってるだろ。
美人測定器の正確さを見くびるな。一万
人並んでも、正確に指差してやるぜ」
B 「どうやって？」

A 「…あ、俺、目見えねえのか…」
B 「…」
A 「な、そのコ、探してきてくれねえか」
B 「現実にいるのかよ」
A 「いたら、この恋を打ち明けたい」
B 「いなかったら？」
A 「死ぬ。夢も希望もねえ」
B 「ちよつと待てよ。極端だな」
A 「恋は盲目。…いや、盲目の恋だなこ
れ」

B 「…で？」
A 「？」
B 「誰に似てるとかあるだろ。お前の見
てる顔をさ、イメージ教えてくれよ」
A 「北川景子の目と、壇れいの鼻、上戸
彩の口で、全体的には大島優子っぽい」
B 「…イメージ出来ねえ」
A 「…どうやったら伝えられるんだ。似
顔絵を描こう」

B スケッチブックに描きだすA。
A 「ぐちゃぐちゃで分らん」
B 「そりやそうだ。目が見えなくて絵な
んか描ける訳ねえじゃんか！」
A 「…(スマホで検索)検索してもその
芸能人しか出てこねえ…」
B 「粘土、買ってきてくれよ」
A 「え？」
B 「やったことないけど、立体なら伝え
られるだろ！」

○同、後日

A 熱心に胸像をつくっているA。
B がやってくる。
A 「今日は遅いな」
B 「足音で分るのか」
A 「…大体こんな感じだと思いが、伝わ
ってるか？」
B 「どこらへんが北川景子？」
A 「このへん」

B 「んー…」
A 「このへんが上戸彩で、ここが壇れい」
B 「そう言われればそんな感じだけど…」
A 「三日に一回は夢に見る。彼女に会いたい。今どこで何をしてるんだろう」
B 「目が見えない人も、夢を見るのかな」
A 「聴覚や、触覚の夢を見るんだそうだから、映像つきの夢を見るんだな」
B 「じゃあ、会ったことあるんじゃない」
A 「あつたら超覚えてるわ。これは正夢なんだよ。もはや俺の生きる希望なんだ」
B 「…」

○廊下

B 電話するB。
「そうなんだ。相談というのはな。…整形をしないかってことなんだよ。どうしてって？ …お前、あいつのことずっと前から好きだったろ？ 今ならチャンスなんだよ。その美女になりすませばいいんだよ。あいつが触ってその顔だつて分るように整形すれば、あいつと結ばれるんだぞ？ これがチャンスでなくて、何なんだよ！」

○病室、後日

A 「よう」
B 「見つかったよ」
A 「え？」
B 「こないだの粘土写真を、探偵を雇って探させた。見つかったんだ」
A 「ホントか！ あのコは実在したのか！」
B 「ああ」
A 「良かった…お前、そこまでしてくれてありがとうな。なんでそこまで優しいんだよ」
B 「…親友、だろうが」

A 「ありがてえなあ。ありがてえ」と、別の胸像に気づく。

B 「ちよつと待て。それ、何？」

A 「もう一回作り直した。精度が上がったろ」

B 「えええええ」

A 「なに？ 全然違う？」

B 「：もう一回やり直し、かも知れん。待っててくれ」

○廊下

B 「手術計画、一端白紙。多分三週間延期。メスを入れる場所を変えて、ヒアルロン酸入れて：。うん。全部で三ヶ月はかかるな」

○病室、後日

B 「三ヶ月かかる」

A 「は？」

B 「彼女はいたが、今遠いところで、のっぴきならない事をしてるんだ。それが明けるまで、三ヶ月待ってくれ」

A 「分った。：待つよ。待つ。必ず連れてきてくれよ」

○病室、後日

A 「彼女、夢の中で初めて口をきいてくれたんだ」

B 「そうか」

A 「それが鈴の鳴るような高い美しい声で：」

○廊下

B 「そう。声帯の手術も必要になった。プラス一ヶ月。手術代？ 乗りかかった船だ。俺が持つよ」

○病室、後日

A 「今度は全身が夢に出た」

B 「痩せ型で、巨乳だろ？ B 90 W 5

9 H 85、体脂肪率17%。任せとけ」

A 「それがさ」

B 「何？」

A 「腕が四本あった」

B 「はあ？」

○廊下

B 「そうなんだよ！ 腕二本移植しなき

やいけなくて！」

○病室、後日

A 「今日の夢は腕二本だった」

B 「なんだよ！ 心配して損したよ！」

A 「そりやそうだ。どうやら人間らしい」

B 「腕二本でいいんだな？」

A 「ふつうの、人間の、彼女で」

暗転。

明転。

○ドアの前、廊下

B、電話中。

B 「あ、着いた？ そう。四階に上がってきて。ああ。もう首を長くして待ってるよ。あいつの目が正確であればあるほど、きみは信用される。あいつはきみにベタ惚れすること間違いなしだ。安心しろよ。あいつがずっと好きだったんだろ？ お前は優しく、情熱家で、ちゃんとしてる子じゃないか。あいつに紹介して誇るべき存在なんだよ。ただ顔があいつの好みじゃなかっただけだよ。中身がいいんだから、絶対好かれるよ。安心しなよ。じゃ、早く上がってきて」

B、電話を切る。

B 「…俺の好きな女が、幸せになる瞬間。
それに立ち会えて、俺も幸せだよ。…待ち
に待ってた、瞬間さ」

暗転。

● エンディング

黒バック・二人キャスト限定ショートドラマ

劇団黒バック

第三回 「消える」

(30分弱想定)

脚本 大岡俊彦

#1 507号室

「初めての相手」「二人目の相手」について静かに語り合う二人。彼らの正体は実は……

#2 世直し

突然超能力に目覚めた男。「遠隔からおっぱいを触れる能力」だという。しかし遠隔から触ってみると、にせ乳だということが分かり……

#3 海賊版海賊

海賊にとらわれた男と海賊。しかしその海賊の正体は。

● オープニング

● タイトル『消える #1 507号室』

○ 暗闇に座る二人

A、Bの二人が椅子に座り、話し合っている。

A 「最初の人の話をしようか」

B 「最初の人」

A 「…覚えてないかい？」

B 「…覚えてないわけないさ。誰でも、最初の人の記憶は鮮烈なものさ」

A 「そうだろうとも。ちなみに僕の最初の人だね、サラリーマンだった」

B 「サラリーマン」

A 「そう。出張で名古屋から来た、若い男だ。…ひどく酔っていた。酒臭かった。夜中、突然マッサー嬢を呼びたいと言いついて、しかも金額で揉めていた」

B 「その子は満額払われたのかい」

A 「日本人じゃなかったんで、ぼったくられた、とずっとぶつぶつ言っていた」

B 「それで、一晩だけ」

A 「それで姿を消したね」

B 「…僕も、強烈に覚えてるよ」

A 「そうだろう」

B 「あの子、受験生だった」

A 「女子高生？」

B 「現役女子高生だね」

A 「ずいぶんはしゃいだろう」

B 「いや。彼女はずっと勉強していて、彼女はそればかり気にしている」

A 「そうなのか」

B 「彼女はなかなか寝つけなくて、単語帳を枕の横に置いてずっと見ていた。黄色いカードの単語帳で、自分でつくった手書きのやつだ。何年も使っていて、それがあると安心するんだろうね」

A 「寝顔は覚えてるかい？」

B 「ああ。幼くて、青い果実のような固
 さが忘れられない」
 A 「それで？」
 B 「そうそう。その単語帳、実は壁とベ
 ッドの間に落ちてたんだ。でも彼女は気づ
 わずに時間通り起きて、出て行ってしまっ
 たんだ。受験はさぞ不安だったろうね。そ
 の後彼女がどうなったかは、僕には分りよ
 うもないけど、その単語帳を初めての思い
 出に、取っておけないかと悩んだっけ」
 A 「いい思い出じゃないか」
 B 「うん。恵まれている方かも知れない
 な」
 A 「……」
 B 「……」
 A 「印象に残っている人の話をしよう」
 B 「そうだね。……訳ありの母親。……中年
 の、太った女だった。ずっと誰かに電話し
 ていた。旦那と喧嘩して、出て来たんだっ
 て。明日あなたの家に泊めてくれないかっ
 て。……でも、泊めてくれる人は見つからな
 かった。彼女は孤独を嘆いたのか、夫との
 事を思い出したのか、ずっと泣いていたよ」
 A 「ずっと？」
 B 「……深夜の、三時か四時ごろまで」
 A 「隣の人は、迷惑だったろうに」
 B 「それが、彼女は枕に顔をうずめたま
 ま、ずっと声を押し殺して泣くのさ」
 A 「なんという孤独だろうか」
 B 「枕から上げた、その顔。……その顔が、
 忘れられない」
 A 「……」
 B 「……君の、印象的な人は？」
 A 「小説家だな」
 B 「男の人？」
 A 「男。中年の、脂っこい感じの」
 B 「君は、男ばかりだね」
 A 「僕は、男の方が多いね」
 B 「それで？」
 A 「本当に原稿用紙をクシャクシャクシ

ヤーってやるんだね。初めて見たよ。映画とかマンガとかで見たことはあったけど」

B 「何日も？」

A 「ずっとだ。一週間は」

B 「長いね」

A 「僕が、気に入ったんだろうか」

B 「たまたまだよ。何でも良かったのかも知れない。支払いは？」

A 「編集の人につけといてくれ、と言っていたよ」

B 「そうかい」

A 「…」

B 「そうだ。最後の人の話を聞かなきゃ」

B 「そうだよ。それがそもそもきつかけなんだからね」

A 「最後の人は、どんな感じだったの？」

B 「老人だ」

A 「男」

B 「男だ。僕は、男は珍しいほうだ」

A 「寡黙だった？」

B 「いいや。ずっと独り言を言っていたなあ。世の中の全てに恨み言があるようだったね」

A 「ずっと文句を言うのかい」

B 「そうだね。けれど、煙草を一服吸った時だけ、静かだった」

A 「おいおい、禁煙だろう？」

B 「最後の一服だと思えば、それぐらい見逃してやろうと思ったのさ」

A 「優しいね」

B 「そうかな」

A 「それで」

B 「それから一言も喋らなくなった。バスタブに行って、ずっと鏡を見て。…十五分ほどじっと顔を見てた。それからロ―プを…鞆の中に持参してただけど…バスタブの上に吊って、そのまま」

A 「首吊りのゼスチャー。」

A 「…」

B 「…首を吊ると、周りが色々汚れると
いうじゃないか。だから彼は気を使ったん
だろうね。洗い流せると考えた末での、実
行だったんだらう」

A 「そうか」

B 「清算も前払いで済ませてたらしい。
警察が来たけど、事件性もなく、驚くほど
すぐに老人は片付いてしまった」

A 「そうか」

B 「でも彼は、知らなかったんだらうね。
人死にのあったホテルの部屋は、縁起が悪
いからって、取り壊されるってことをさ」

A 「ああ…」

B 「…」

A 「507号」

B 「なんだい506号」

A 「君と僕をへだてているこの壁は、取
り壊される。老人が最後に使ったバスタブ
は撤去されて、ここは一続きの506号室
になる。スイートルーム506号室にだ。
507号室は欠番だ。このホテルから存在
しなくなる」

B 「ああ」

A 「つまり、君はこの世からいなくなる」

B 「そうだ。僕は、君に吸収されてしま
うようなものだね」

A 「そうかも知れない」

B 「…部屋というものは、そこにいた人
のことを、全て覚えていっているものだ。だから
僕の記憶を君に全部預けて、それから吸収
されたい」

A 「ああ。507号室の記憶は、506
号室…僕が引き継いでゆくよ」

B 「ありがとう」

A 「こうやって、部屋の記憶は部屋たち
がつむいでゆくのか」

B 「周囲を見渡す。」

B 「このホテルがいつか取り壊された
ら？」

A 「我々が、隣のビルに引き継いでもら

うさ」

B 「そうやって、古い部屋は何もかも覚えてるんだね」

A 「そうだ」

B 「この街で一番古い部屋はどこだろう。彼は、僕の記憶もいつか引き継ぐのだから」

A 「そうだろうとも」

B 「じゃあ安心だ」

A 「…」

B 「…」

A 「さて。大まかな所はつかめた。単語帳を忘れていった受験生。孤独な母親。最後の一服を禁煙の部屋で吸った老人。まだ時間はある。全部の記憶を僕に渡してくれ。全部の記憶を渡したら、君：507号室は、消える」

B 「そうだね」

A 「…」

B 「…」

A 「二番目の人は？」

B 「二番目の人は…」

暗転。

●タイトル『消える #2 世直し』

○高校の校庭

高校生二人。

A 「オイオイオイ。とんでもねえことになったぞ！」

B 「なんだよ、どうせいつもの大袈裟なやつだろ？ 部室の水道が止まらねえとか、渡り廊下に犬が侵入したとかさ」

A 「…ちがうんだ。今度はマジなんだよ」

B 「何」

A 「いいか。よく聞け」

B 「もったいぶってんじゃないやねえよ」

A 「…俺、超能力に目覚めた」
 B 「は？ …マジで言ってるの？」
 A 「マジなんだよ！ てか、お前、疑っ
 てるだろ」
 B 「普通疑うだろ」
 A 「超能力にも色々あるだろ？ テレパ
 シーとか予言とか。俺は、その、テレキネ
 シスって奴に目覚めたんだ。念動力ってや
 っだ」
 B 「ほーん。で？」
 A 「でもハッとやって動かすレベルじゃ
 ないみたいだ」
 B 「なんだ」
 A 「でもその代わりな…俺…遠くのもの
 をさわられるみたいなんだ」
 B 「？」
 A 「たとえば…」
 A 「両手で揉む仕草。」
 A 「遠くのおっぱいをもめる」
 B 「マジで！（急にテンション上がる）」
 A 「マジだよ！」
 B 「ちよーちよーちよー、じゃあの子揉
 んでみるよ！」
 A 「よし…いくぞ…」
 B 「（ゴクリ）」
 A、揉む。
 二人で「おお？ おお？ おおおお？」
 A 「…な！」
 B 「（握手）神！」
 B、辺りを見回して。
 A 「あの子は？」
 B 「…よし」
 A、揉む。
 二人で「おお！ おお！ おおおお！」
 B 「どうだ？」
 A 「柔らかさも、人によって違うんだよ
 …」
 B 「神！」
 B、興奮が止まらなくなってくる。
 B 「よし、街に出よう！ もっとおっぱ

A 「大きい女がいるはずだ！」
「なるほど！ お前頭いいな！」

○街

A 「どうする？ どうする？ 誰から行く？」

両手を揉む形にしている。

B 「その手、やめろ。通報されるわ。バレないようにやんなきゃ」

A 「たしかに」

と、二人の間をスゴイ女が通る。

二人、思わず真ん中を道を開け、背中を目で追う。

二人 「…」

目を合わせる。

B 「よし、揉んでくれ」

A 「ダメだ。後ろからじゃダメなんだ。

前に回らなきゃ」

二人、ダッシュ。

B 「近すぎたらばれる！ もっと走れ！」

二人、ダッシュ。

A 「曲がった！ 先回りしろ！」

二人、ダッシュして曲がる。

A 「よし！」

揉む。しかし、違和感。

A 「…？」

「どうした」

A 「あの女：偽乳だ！」

B 「何イツ！」

A 「Fカップと思いきや：シリコンだ。

くそつ：騙された：！ ひどい：男の純情

を弄びやがって：」

A、この世の終わりのように嘆く。

B 「…俺さ、今まで黙ってたんだけどさ

…」

A 「何？」

B 「実は俺も、超能力者なんだ」

A 「なんだと？」

B 「…俺の能力はテレポ―ト。遠くのも

の瞬間移動させられるんだ」

A 「何イ！」

B 「あの偽乳のシリコンをテレポートさせてやる。…いや、ペチャパイになるのはかわいそうだから、あのオッサンの腹の脂肪をそこにテレポートさせてやる。オッサンもスリムになって、Win・Winだろ」

A 「…よし、やってみてくれ」

B A 「ハッ！（テレポートさせる）」

A 「（揉む）…たしかに！」

B 「よし。世直しに行こう。偽者は消えるべきだ」

A 「？」

B 「お前が偽乳を見破る。俺がWin・Win。世直しだ」

A 「…世直しだ！」

A × 「（揉む）いた！」

B 「ハッ！（テレポートさせる）」

A × 「（揉む）こいつも！」

B × 「ハッ！（テレポートさせる）」

A 「いやー、随分世直ししたな。偽乳は随分この世から消えたな！」

A 二人、ハイタッチ。

A 「ところで、他人の脂肪細胞移植して、拒否反応とか大丈夫なのか？」

B 「なにそれ」

A 「……………（顔が青くなって来る）」

暗転。

●タイトル『消える #3 海賊版海賊』

○監視船の上

スーツ姿のA、後ろ手に縛られている。
野卑な格好のB、銃（サブマシンガン）

をつきつけている。

A 「日本政府として、あなた方海賊に正式に抗議します。これは領海侵犯であり、法治国家への挑戦行為だ。即刻、海賊行為を辞めなさい」

B 「うるせえな！」

B 銃をこめかみにつきつける。

A 「…」

B 「どんなお偉いさんでも、こいつの前には命乞いかい！ 海の上では俺たちが正義だ！」

A 「…あなたたち黒ヒゲ団の要求は、一体何だ」

B 「アンタに言ってもしょうがねえけど、身代金の要求だよ！ ちよいと活動資金が欲しかったところに、飛んで火にいる政府調査団とこさ！」

A 「…そうやって毎度毎度国家権力に盾ついて、何が目的なんだ」

B 「黒ヒゲ団に目的なぞねえ。何にも縛られず自由に生きる、ホンモノの男たちの集団だからな。お前らはせいぜい国とか規制とか、仕事とかに縛られてる。大体、ここは海だぞ？ スーツ着てるのはおかしいだろ。バツカじゃねえの？ もっとTPO考えろや」

A 「…バカはそっちだろ」

B 「なんだと？」

A 「海賊なんざ、どれだけ頑張ったって少数派だろ。お前らはこれから来る大量の援軍に捕まって終わるだけだぞ。数が多いほうが勝つ。多数派の方が正義だ」

B 「ふん。国家なんか、結局一番大きな悪党の癖に。ところが海ではどうだ。ここではコレ（銃）が正義だろうが！」

A 「…海賊ふぜいが」

B 「海賊が少数派の悪党を意味するのなら、お前こそここでは海賊だ」

A 「と。A、Bの腕章に気づく。」

A 「あれ？」

「…なんだよ」
 「あれ？」
 「…！（腕のマークを隠す）」
 「それ、黒ヒゲ団のマークじゃないよ
 ね？」
 「（隠しながら）黒ヒゲ団だよ！」
 「違うな！ 黒ヒゲ団のマークの、パ
 チモンだったぞ？」
 「ハア？ そんな訳ねえだろ！」
 「ヒゲの筋がホンモノは五本だよ。そ
 れ何本？」
 「（隠したまま）…五本だよ！」
 「いいや、四本だった」
 「…」
 「まさか、お前ら、黒ヒゲ団のニセモ
 ノか」
 「…」
 「面白いぞ！ ニセ海賊！ いや、海
 賊版の海賊って訳か！」
 「なんだよそれ！」
 「ニセモノのニセモノじゃねえか！
 お前ら黒ヒゲ団に扮して、身代金だけ頂こ
 うって腹だな？」
 「ニセモノのニセモノだろうが何でも
 いい！ いいか！ 海の上ではこれだけが
 正義だ！」
 両手で銃をつきつける。
 「…」
 「黙っておびえてろこの野郎」
 「…やっぱりそうか」
 腕のマークが露わになっているのを見
 る。
 「ヒゲ四本。ニセモノ確定だな。海賊
 版の海賊だ」
 「…（舌打ち）」
 「海賊なんて所詮ニセモノだ。国家権
 力こそホンモノなんだよ」
 「…ニセモノのニセモノはホンモノ、
 っつてこともあるかもだぞ」
 「詭弁だな。ホンモノが国家。黒ヒゲ

も、海賊版黒ヒゲも、等しく権力の海賊版にすぎない。海賊版ってのは、正規品より安くて、品質が劣るってことだ」

B 「海賊版一掃キャンペーン実施中！つてか」

A 「そうかも知れんなニセモノ野郎」

B 「何言ってるんだ。お前らの方こそニセモノだろうが」

A 「？」

B 「庶民から高い税金巻き上げといて、自分らだけいい暮らししやがって、日本はちっとも良くならねえじゃねえか。ちったあこの国を良くすることを考えろや！ 自分の利権ばかり考えてるニセモノ政府が！ そもそも黒ヒゲさんは、新しい自由の国を作ろうって考えなんだ。お前らニセモノに国を任せるより、よっぽど日本を考えてるホンモノじゃねえか」

A 「でもお前ら、黒ヒゲ団じゃないんだろ？」

B 「どっちだっていいだろ！」

切れてまた銃をつきつける。

A 「またすぐそれを持ち出す。いいよ。俺こそニセ政府だと認めてやるよ」

B 「はあ？」

A 「俺さ、実は経歴詐称で入ったんだ」

B 「マジか」

A 「慶応大卒で一流証券会社エリートからの転身ってことになってんだけどさ、うまいこと書類をちよろかまかしたんだよ。口八丁さえ上手けりゃ渡ってける世界だからな。あとは強い方にかになびいて、自分の利権を確保すれば一丁上がり。経歴詐称しようが、やったもん勝ちの世界だからな」

B 「…お前こそ真のニセモノってわけか」

A 「ははは。ニセモノばかりだな世の中は。ひよっとしたら、黒ヒゲ団のボス、黒ヒゲなる人物も、実在しなかったりしてな！」

A B 「…なんだと？」
A 「お前、会ったことあんのかよ。さつきの黒ヒゲ様の理想論は、世間の噂で聞いた奴だろ」

B 「お、おう」
A 「実際のところは、黒ヒゲ団を名乗るニセ海賊ばかりで、ホンモノの黒ヒゲ団なんてどこにもいないかも知れない」

B 「…」
A 「もう一度聞くぞ。黒ヒゲに、会ったことあるのか？」

B 「…（首を振る）」
A 「もう誰かに殺されて、海賊版海賊だけが横行してるだけだったりしてな。政府に国のことを考えるホンモノなんていないで、ニセモノばかりであふれているようにな！」

B 「…（動揺）」
突然、Aが縄抜けしてBの銃を奪う。

B 「えっ！ 何だ！」
Bに銃を向けるA。

A 「ははは。しこしこ縄を切るのに時間がかかったよ。長々と適当なおしゃべりに付き合ってくれて、ありがとう」

B 「くっそ！」
襲いかかる。A、ためらわず撃つ。

B、死ぬ。

A 「海じゃ、これを持つての方がホンモノなんだろ？」

Bの死体を蹴って、海へ落とす。

銃も海へ捨てる。

A 「…真実なんてどうでもいい。いずれ消える」

再び縄に縛られていた振りをする。

A 「しかしバカだなあ。ただ海に来るのに、スーツ着る訳ないじゃんね。このあとカメラに写る用に、着てるに決まってるよね？」

暗転。

● エンディング

黒バック・二人キャスト限定ショートドラマ

劇団黒バック

第四回 「やり直す」

(30分弱想定)

脚本 大岡俊彦

#1 マジシヤンの自殺

暇な捜査二課に配属された若い刑事。暇な課長の話を聞いているうちに、それが縦断事件のトリック解明につながっていく。

#2 命知らず

建設中の世界一高いタワー。無断で登ってフェイスブックにあげようとすると命知らずがいた。しかしもうひとりいた。どっちが先に上るんだ？

#3 雨宿り奇譚

雨宿りをするため、商店街の軒先であった二人の男。これは偶然の出会いではなく、計画されたものだった。

● オープニング

● 『やり直す#1 マジシヤンの自殺』

○ 捜査二課

A (ベテラン刑事)、煙草を吸っている。
そこへ新人刑事のBが挨拶に来る。

B 「おはようございます！ 本日付で捜査二課に配属になりました、新入りの榎本と申します！ 粉骨碎身の覚悟で、日本の平和を守ります！」

敬礼。

A 「…(無視)」

B 「おはようございます！」

A 「…(煙草の灰を落とそうとする)」

B 「(それを両手で受け)おはようございます！」

A 「聞こえてるよ。よろしく」

B 「よろしくお願いします！」

B、目をキラキラさせているが、Aは
退屈そうに煙草を吸う。

A 「…」

B 「…」

A 「何？」

B 「わたくしは、どんな事件の担当になるのでしょうか！」

A 「…ならないよ」

B 「え？」

A 「ないよ。二課に事件なんか」

B 「ハイ？」

A 「二課は、島流し部署だよ。エースの捜査一課に入れなかった奴のな」

B 「…？」

A 「大体、明日、一課で大捕り物があるんだ。猫の手も借りたいだろう。それに呼ばれてねえってことは、お前さん、上に使えないって判断されたってことだ」

B 「…わたくしは、どんな事件の担当になるのでしょうか！」

A 「座って、電話番号でもしてろ。鳴らねえけど」

B 「…わたくしは、どんな事件の担当になるのでしょうか！」

A 「明日の大捕り物でも手伝いにいけば？」

B 「…ちなみに、それは大事件ですか？」

A 「アレ？ お前、その件について何も聞いてないの？」

B 「ハイ！」

A 「…」

B 「何か、あつたんですか？」

A 「…（煙草を吸う）」

B 「事件ですか？」

A 「…」

B 「大事件なんですよね？」

A 「…」

B 「…（目をキラキラさせている）」

A 「喋るんじゃないぞ。署内の機密だ」

B 「ハイ！」

A 「マジシャン・ゼロの自殺の件」

B 「自宅で腐乱死体で見つかったって奴ですか！ 死後一ヶ月経過してたという猟奇的自殺事件」

A 「…」

B 「一カ月ごとの公演をする正体不明の覆面マジシャン・ゼロ。戦闘機と美女を入れ替えるスーパーイリュージョンが有名のマジック界の大物。…一ヶ月ごとの公演以外は決して人に姿を見せない、謎のベールに包まれた男。前回の横浜公演から一ヶ月たった札幌公演の為、スタッフが六本木の自宅に訪れると、中から鍵がかかっていた。大家さんに開けてもらい中に入ると、腐乱死体として発見されたという。しかもネズミに食い荒らされた、無残な姿で」

A 「…詳しいな」

B 「週刊誌もネットニュースも全部見えます！」

A 「ふん。…世間では、どうなってる？」

B 「謎の自殺ってことになってます！
服毒自殺で、しかも密室でしたから！ 愛
用の椅子に座り、ペットの方向を見て死ん
でいた。そのペットも本人も、ネズミに食
い荒らされていた訳ですが。…検死の結果、
体内から毒の痕跡が出て、当局は自殺と断
定」

A 「その当局ってのが、捜査一課だ」

B 「はあ」

A 「ゼロは、自殺じゃねえ」

B 「…はい？」

A 「殺されたんだ」

B 「マジっすか！ 密室ですよ？ 鍵は
内側からかかっていた！ 現場は高層四十
階！ マンションの管理人が鍵を開けたの
は、マジック公演のスタッフが証言してい
る！」

A 「…」

B 「密室トリック！」

A 「楽しそうに言うんじゃないよ。人一
人死んでんだ」

B 「ハイ。すいません。犯人は？ 動機
は？ いや、その前にどうやって鍵を？」

A 「ゼロの飼っていたペットは何だ？」

B 「ハツカネズミ。世界的に珍しい種類
だそうです」

A 「ハツカネズミはどうやって飼う？」

B 「え？ それって、檻の中で…こう(手
でやる)クルクル回る運動器具とかで」

A 「それに糸結びつけりゃ、勝手に巻い
て、内側からカチャリ。鍵かけれるだろ」

B 「…そんな糸は発見されていません」

A 「髪の毛なら？」

B 「…玄関の鍵に届くほどの長い髪は、
発見されていません」

A 「現場は、ネズミが荒らしたんだよ
な？」

B 「ハイ」

A 「…ゴキブリは、人の落とした髪の毛
食うって話、知ってるか？」

A B 「えっ」

A 「鍵かけた、髪の毛落ちる、ゴキブリが食う。：あとはネズミを空調か台所から放せばいい。ゴキブリごと食ってくれるだろ」

B 「そんな：他殺ってことですか？ 自殺に見せかけて？ :じゃ、誰が、何の為に？」

A 「マジシャン・ゼロ。本名田中一樹。子供の頃、新興宗教ブラック教団の施設に預けられていた」

B 「え？ :あの？」

A 「そうだ」

B 「山奥に巨大な仏像を建てて景観問題起こしたり」

A 「周辺住民ともめてる」

B 「断食行で有名なんでしたっけ？」

A 「父親が、狂信的なブラック教団の信者で、母親と離婚して親権を引き剥がしたのが七歳。以来、妹と共に施設で育てられた」

B 「：はあ」

A 「半年後、妹が死んだ」

B 「え？」

A 「証拠はない。断食の強制で死んだか、信仰の末自分で死んだのかは分らん。ただ父親もその後断食行で命を落としている。一年後田中は施設を脱走、覆面マジシャン・ゼロとして七年後世間に現れる」

B 「：はあ」

A 「あの密室で使われた毒物は、ブラック教団が断食行で使っているものと同じやつだ」

B 「じゃあ、ブラック教団がゼロを追ってきて、自殺に見せかけ口封じを：！」

A 「そこまで、俺個人で突き止めていた」

B 「え？」

A 「それを捜査一課に横取りされたのさ。明日、ブラック教団の本部に強制捜査が入る。一課の手柄になるだろうな。マジシヤ

ン・ゼロ殺人容疑に加え、きな臭え余罪も
タツプリ出てくるだろう」

B 「我々二課は、指を啜えてそれを見て
ろと？」

A 「捜査一課のお手柄に、拍手」

B 「何すかそれ！ 山さんの捜査を横取
りされたんでしょ！」

A 「警察が手柄を上げられりや、組織人
としては万歳じゃねえか」

B 「：行きましようよ！ 明日の一斉捜
査！ 日本を揺るがす大事件じゃないです
か！ 一大教団の本部にメスが入るんです
よ！」

A 「いや。俺は、新潟へ行くことにして
いる」

B 「はい？」

A 「：見つかつたマジシャン・ゼロの腐
乱死体。あれは本人じゃない」

B 「え？」

A 「彼の得意マジックは？」

B 「戦闘機と美女の：すり替え！ まさ
か、遺体をすり替え？ ：バカな、歯型が
一致して：」

A 「歯形のすり替えは、戦闘機と美女の
すり替えより難しいと思うか？」

B 「：：じゃあ、ゼロは生きてる？ 何
のためにそんなことを？」

A 「捜査一課に、本部に踏み込ませる為
だろ」

B 「ああつ！ 教団を陥れるための復讐
か！ 教団に殺人の汚名を着せて、まんま
と脱出に成功したってことですか？ ：そ
んなの大スクープじゃないですか！ 子供
の頃の虐待！ ブラック教団への復讐の為
の狂言自殺！ すり替えという大どんで
ん！ そんなの一課の横取りにされる理由
はないですよ！ あ！ ：新潟って、：そ
うか、そこにゼロが潜伏してるというわけ
ですね！」

A 「：ひなびたスナックが、片田舎にあ

っつな。毎週週末、覆面のマジシャンが、
 ちよつとしたテーブルマジックをやつてく
 れるんだ。名刺と名刺をすり替えたり。マ
 ドラーとボールペンをすり替えたり。…名
 を、マジシャン・ワン」
 B 「…彼を確保しに行くんですね！ お
 供します！」
 A 「…何でだ？」
 B 「え、だって、…ブラック教団壊滅の
 鍵を握ってる超重要参考人じゃないです
 か！」
 A 「ブラック教団の不正が暴かれる。そ
 れだけで十分だろ」
 B 「じゃ、何の為に行くんすか！」
 A 「そのスナックはな、強制的に引き離
 された、彼の母親が経営してるのさ」
 B 「あ…」
 A 「彼は、人生をやり直している。俺は、
 近所で評判の、片田舎のマジックを見に行
 くだけさ」
 B 「何ですか！ せつかく、大スクー
 プなのに！」
 A 「…マジックにだまされるのは、大人
 のたしなみだろう？」
 B 「…」
 A、その場を去ろうとする。
 B、走って追いかける。
 「お供します」
 「…」
 「わたくしも、マジックにだまされに」
 「（にやりと笑う）」
 「…」
 A 「ようこそ、捜査二課へ」
 二人、出発。

暗転。

●タイトル『やり直す#2 命知らず』

○塔の上

舞台の床に、白テープが貼ってある。

「王」の字を九十度横倒しにした形。

(これが鉄骨を示すことは、あとで分る)

A 「よっ…」

上手の端から、Aが登ってくる。

A 「ふう。…(腕時計を見て)思ったより、手こずったな。(上を見て)…あと、ひと息」

鉄骨の端に座り、煙草に火をつけ、一服。

と、下手の端から、Bが登ってくる。

B 「アレ? 先客? すいませーん」

A、気づく。

B 「おたくも、『建設中のタワーに無断で登る、命知らずの冒険野郎』ですか?」

A 「…いかにも」

B 「もう?(と上を指し)」

A 「(首を振り)ファイナルアタック前」

B 「よかったー! じゃ、この世界一のスーパーダイトワーは、まだバージンなんですわね! よおし!(体をボキボキ鳴らす)」

A 「ちよつと待て(煙草をもみ消す)」

B 「はい?」

A 「お互い、一番乗りを目指してるライバルだ」

B 「そうですよ! 俺、自撮り棒でフェイスブックにアップする為に着たんだから! イエーイパシヤって!」

A 「だが、こっからは強度が足りなくて、一人しか登れない。二人捕まったらポキリと折れる」

B 「マジっすか! じゃあ、ジャン、ケン…」

A 「待て待て。俺がここに先に来た」

B 「え?」

A 「だから先だ」

A B 「えええ」
 A B 「と言いたいけど、君の気持ちも分る。ここはどちらが命知らずか勝負して、ファーストアタック権を賭けないか？」
 A B 「勝負？」
 A 「ほっ！」
 と、ひとつの鉄骨から、隣の鉄骨へ跳び移る。バランス崩しそうになるが、なんとか立つ。
 A 鉄骨と鉄骨の間に手をつっこみ、
 「この下何にもない。二千メートル何にもない。落ちたら即死！ 落下時間は、三十秒ぐらいあるけど！」
 B 「：そういうことか」
 A 「お前、こんなこと出来んのかよ！」
 B 「こういうことね？」
 B、鉄骨ギリギリに立つ。
 足先から徐々に鉄骨の外にはみ出して、かかとだけで立つ。
 A B 「ホラ！ ホラホラ！」
 A 「：」
 A、鉄骨の上を走り、滑って、ぎりぎりで止まる。
 A 「どう？」
 B、鉄骨の上で側転。
 A B 「どう！」
 A 「：」
 A、鉄骨の上で寝転がり、徐々に移動して、体の右半分を鉄骨の外に出す。
 A 「どう？」
 A 「：」
 「ほっ！」
 A、魚が跳ね上がるようにして、着地。
 B、一番長い鉄骨の上を走り、ぎりぎりまで百八十度ターンして帰ってくる。
 A 「ウエイイ！」
 A、逆立ち。
 B、「王」の字の鉄骨の上を、次々にジャンプして渡る。
 B 「ウエイイ！ ウエイイ！ ウエイイ！ ウエイイ！」

「イ！」
A、鉄骨の上でバク転。
B 「ハイー！」
B、前から倒れ、足を鉄骨に残したまま、もう一本の鉄骨の上に手を置く(胴体の下は何もない)。
A、対抗して同じポーズ。
「ハイー！」
B、あん馬のようなポーズ。
鉄骨の交差部分を使って、両手は鉄骨の上、尻の下は何もない。
「ヤッホイホイ！」
Aも同じポーズ。
「ヤッホイホイ！」
B、ジャンプして鉄骨の上へ。
Aも同じこと。
二人、息切れ。
「：互角か、命知らず野郎が」
「互角だな、命知らず野郎が」
「勝負、やり直しだな」
「：(息切れ)：」
「：とりあえず」
A、Bに煙草を一本おごる。
「サンキュ」
A、自分も一本。
二人の煙草に火をつける。
「ぷはー」
二人
「：しかし、上空二千メートルの眺め見事なもんだな」
は、
「山に登るより全然おもしろえよな」
A B
「：しかし、風がキツイな」
B A
「上空二千メートルだからな」
二人
「あっ」
二人とも、煙草を風に飛ばされる。
二人、下を見る。
A
「：やべ」
B A
「：途中で積んでる、資材だよな、あれ」
B
「やべえ。燃えてる燃えてる」
A
「：これ、俺ら降りてっても間に合わ

ないよね？」

A 「あー。火は上に燃えてくるからなあ」

B 「あー。スーパードバイタワー、完成前に大炎上かあー」

A 「…これ、俺ら、死ぬよね？」

B 「死ぬな」

A 「（上を見て）じゃ、登ろっか」

B 「折れるかもなんだろ？」

A 「その時上にいたほうが勝ち、ということ」

B 「（笑う）よっしゃ！ フェイスブックに上げなきゃ！」

二人、上りの柱に手をかける。

暗転。

●タイトル『やり直す#3 雨宿り奇譚』

○シャッターの閉まった店の、軒先

A スーツ姿のA、頭の上を覆いながら走って入ってくる。

A 「ふーっ」

袖やズボン、頭などを払う。

雨に降られたようだ。

A 「はー」

一息ついて、天を伺う。手をかざす。

走って次の場所に行こうと思うが、やっぱりやめる。

A 「…（ため息）」

なかなかやまない。

スマホを出し、メールを打つ。

すぐかかってくる。

A 「もしもし。ああ。雨が、ひどくてね。コンビニの傘も最近高いし、ちよっと待たばやむよ」

待つ。

と、Bが、静かに歩いて軒先に入ってくる。

軽く会釈するB。
軽く会釈するA。

B 「…やまないですね」

A 「…すぐやむかと思っただんですがね」

B 「…」

A 「…」

B 「こういうとき、最近の人すぐスマホ見るけど、なんで見ないんですか？」

A 「…たまには、雨でも見ようかと」

B 「…」

A 「…」

B 「暇だから、お喋りでもしますか。スマホ見てばっかだと、こういう時見知らぬ人と交流、とかの機会もないし」

A 「…袖摺りあうも、他生の縁。いいですね。といっても、君は随分若いのに、スマホを持ってないんだね」

B 「嫌いなんです。…じゃ、人生の先輩の話聞かせてくださいよ」

A 「…僕の話で、面白い話なんてあるだろうかねえ」

B 「お仕事は何を？」

A 「しがないサラリーマンさ。この年で部長にもなり損ね、詰まらない判子を押したりしてただけだ」

B 「詰まらないんですか」

A 「詰まらないねえ」

B 「…何か、楽しみなこととかは？」

A 「うーん、娘のことが心配なだけだな」

B 「心配」

A 「二人、娘がいてね。一人は中学生、一人は高校生。上のほうは来年大学受験で、でも偏差値がね。私立行かせるほど、部長になり損ねた父は稼いでやれないのさ」

B 「部長になつたら、私立行かせられる」

A 「…そうかも知れない」

B 「なれるといいですね」

A 「…こんな話、面白いかい？」

B 「面白いですよ。こんなことでもなければ、聞けない話だもの。娘さんの写真

は？」

A 「とびきりの美人だ(スマホを見せる)」

B 「：ああ。：はいはい」

A 「娘さんを俺にくださいとか言うなよ？」

B 「まだ高校生なんだ！」

A 「：ああ。：はいはい」

B 「：」

A 「奥さんとは、仲いいですか？」

B 「そうだな。良いわけではないが、悪いわけでもない。ごく普通か」

A 「なんだ。結局、幸せなんじゃないですか」

B 「幸せ？　：こういうのを、幸せというのかね？　：言うのだろうなあ」

A 「そうですよ」

B 「：」

A 「：」

B 「君は？　見たところ、：大学生かな」

A 「そんな感じです」

B 「専攻：とかは」

A 「たいしたことないんで、それより家族の話でも」

B 「そうか。じゃ、家族の話聞いてみようか」

A 「うちには、父はいません」

B 「えっ。それは、悪いことを聞いた」

A 「悪くはないですよ。僕は、母が一人で立派に強く生きてきたことに、誇りを持つてますから」

B 「そうか。何よりだ」

A 「僕の父は、母を捨てたんです」

B 「それはひどい」

A 「僕は、父に会ったことがないんです。離婚以来、ずっと母のそばにいましたが、一度も連絡はなかった」

B 「そうか。：立ち入ったことを言うようだけど、あなたのお父さんは、君を愛していると思うよ。息子を愛さない父はいないと思う。たとえ、会えなくてもだ」

A 「：ありがとうございます。信じます」

A 「…その、母子家庭で育って、兄弟と
かは」

B 「いません。母は子供を生めない体にな
ってしまったので」

A 「そうか。また嫌なことを言わせてしま
った」

B 「気にしないでください。…しかし、
やまないですね」

A 雨を気にする。
「…そうだね」

B 「昔のアニメで、駅を降りると、奥さ
んが傘持ってきてくれたりするじゃない
ですか。そういうのはないんですか」

A 「いやあ。そんなの現実で見たことあ
るかい？」

B 「ないですね。昔はあったんですか？」

A 「あったかも知れないけど、余程ラブ
ラブじゃないとな」

B 「そうですね」

A 「ウチの奥さんは…持ってきてくれな
いさ」

B 「どうして？」

A 「さつき、雨宿りするって電話したか
ら」

B 「…」

A 「…」

B 「あなた、嘘をつきましたね」

A 「嘘？」

B 「奥さんと仲がいいって」

A 「いや、普通だと言ったよ」

B 「それが、嘘だ」

A 「？」

B 「あなたは奥さんと仲が悪い。そうで
しょう？」

A 「何を根拠に」

B 「ケータイの待ち受けが、自分と娘二
人。奥さんはうつっていない」

A 「…別に、いないこともあるだろ」

B 「そうかも知れませんか」

A 「…」

「…」
 「何が言いたいのかね」
 「今日、何の日か、知ってます？」
 「？ …いや」
 「僕の、二十歳の誕生日なんです」
 「そうか。それは、おめでどう」
 「ありがとうございます」
 「…あまり、嬉しそうじゃないが」
 「本当の誕生日じゃないので」
 「えっ？」
 「予定日は、一ヶ月先のはずだったんです」
 「予定日：？」
 「それが、今日になってしまった」
 「…？」
 「丁度二十年前の今日。その時も雨だった。そう。…丁度、こんな感じの」
 「…」
 「僕の母は、傘を持っていたんです。駅に向かって、僕をお腹に入れたまま。…あなたが、雨に濡れるのを心配したから」
 「…なんだと？」
 「そうして、交通事故に遭った。命は取りとめたが、お腹の子、僕は流産。母は、二度と子供の生めない体になった」
 「…」
 「僕はある時の子です。父さん」
 「…お前：」
 「予定日に生まれていれば、ひと月先が僕の誕生日になったでしょう。でも僕は死んでしまった。僕という水子霊の誕生日が、今日なんです。あれから、僕は二十歳になった」
 「…そんな、まさか：」
 「どうして母さんを捨てたんです？ 母さんは、まだ父さんのことを愛していますよ？ 僕は幽霊となっても母さんのそばを片時も離れなかったから、誰よりも知ってる」
 「…」

B 「男女のことですから、息子がどう
う言うの間違ってると思うけど、あなた
は奥さんと仲が悪いことを匂わせた」

A 「…」

B 「父さん。母さんは、僕に名前をつけ
てくれなかった。僕の名前は、何？」

A 「…信輝。男の子だったら、そうつけ
ようと思ってた」

B 「…信輝。信じるに、輝く？」

A 「ああ」

B 「いい名前だ。父さん、ありがとう。」

A どうやら、これで僕は成仏できる」

A 「え？」

B 「水子は二十歳になると、子供じやな
くなるから。さようなら。母さんによろし
く言つといて。会えてよかった。今日みた
いな雨の日に、信輝を思い出してね」

B、走って雨の中に出てゆく。

A 「あ、おい！ おい！」

A、追うが、見失う。

A 「…」

とぼとぼと、軒先に戻ってきた。

A 「…」

雨はやまない。

思い切って、電話をかける。

A 「もしもし？ …ああ。僕だ。…二十
年ぶりに、なるかな。…もう君に電話する
つもりはなかったんだ。俺だって、家庭持
ちだからな。…なんで電話なんかしたつ
て？ 信輝に会ったんだ。誰かって？ …
話せば、長くなる。…まあ、いいや。雨が
上がるまで、まだありそうだ。…なんなら、
傘を持ってきてくれないか」

暗転。

● エンディング

黒バック・二人キャスト限定ショートドラマ

劇団黒バック

第五回 「実は」

(30分弱想定)

脚本 大岡俊彦

1 考え方の博物館

ここは考え方の博物館。困った男がやってくる。

2 ジェットコースター

女二人にドタキャンされ、男二人でジェットコースターに乗る羽目に。

3 皇居ジョギング

ジョギングをする男に、スナイパーに狙われているという男が助けを求める。

4 菌の床

菌のいるところに、あたしらい菌の新しい入りがやってきた。嵐が来るぞ！

5 睡眠代行いたします

悪魔と取引した男。悪魔の秘密をばらさない代わりに、「だれかの代りに睡眠することが出来る」という奇妙な能力を得た。眠って金儲けができるなら、こんなに楽なことはない。しかし…

● オープニング

● タイトル 『実は#1 考え方の博物館』

○ 考え方の博物館

A、座っている。

B、訪ねてくる。

A B 「ここが、考え方の博物館ですか」

A 「いかにも」

B、周囲を見渡す。

B 「スゲエ。古今東西の本だらけだ。… ネットにある知識とかは？」

A 「その端末で。独自に整理しておいたので、ここの本棚並みに検索することも出来る」

B 「つまり、世の中の全ての考え方が…」

A 「ここにあるわけだ」

B 「スゲエ」

A 「で、何をお探しかな？」

B 「えっと：好きな子に彼氏がいて、悩んでいます。これをどう考えればよいですか？」

A 「ふむ。では、B | 6 7 8 | N | 2 4 を」

B 「はい（棚を探す）」

A 「ざっくり言うと、敵はその彼氏一人だから楽だ、という考え方だ」

B 「？」

A 「彼氏のいない子なら、彼女の理想を上回らんといかんだろ。それに比べたら、その彼氏一人を上回れば勝てるぞ」

B 「なるほど！ そう考えればいいのか！」

A 「（指差して）その棚に」

B 「ありがとうございます！ お借りします！」

B、走って本を取ってくる。

× × ×

別の日。

B 「すいません。また考え方を知りたい
 のですが」

A 「今度は何を」

B 「777人のトーナメント戦は、何試合
 合ありますか？ 2、4、8、16…と計算
 していくと、割り切れないというか…」

A 「全ての試合で必ず敗者が出て、一人
 が残るのだから、776試合」

B 「なるほど！ そう考えればいいの
 か！」

A 「その考え方は、Z | C B | 7 0 2 4
 を」

B 「ありがとうございます！」

× × ×
 走って本を取りに。

別の日。

A 「またやって来たか」

B 「はい。人に嫌われないようにするに
 は、どう考えれば？」

A 「それなら、M | 1 1 7 8 | H | 1 5 |
 「はい」

A 「自分を嫌う人は一定数いる。好かれ
 る人を増やさない」

B 「なるほど！ そう考えればいいの
 か！」

本を取りに走る。途中で立ち止まる。

B 「あれ？」

A 「どうした？」

B 「本読むより、実は、あなたに直接人
 生相談したほうが早くないですか？」

A 「…」

B 「…」

A 「たしかに」

暗転。

●タイトル『実は#2 ジェットコースター』

○ジェットコースターの席

A、B、ジェットコースターに乗り込む。

A 「これ？（安全装置をつけよう）」

B 「おう。こう」

A 「：こうか」

A 二人、安全装置装着。
ガクン、とジェットコースターが動き、上りはじめる。

A 「：俺このゆっくり上ってくの苦手なんだよ。なんか死刑執行みたいでさ」

B 「わかる」

A 二人、微振動しながら上っていく。（芝居で角度をつけるか、カメラでやる）

A 「しかし真由美もメグもドタキャンしやがって、男二人で遊園地ってのも間抜けだな」

B 「しかも野郎二人でジェットコースター上ってな（笑）」

A 「：」

B 「：」

A どんどん角度が上がっていく。
二人、周りを見ながら。

A 「チケット代勿体ねえのもあるよな」

B 「たしかに」

A 「：」

B 「：」

A 「：あのさ、実はさ：」

B 「何？」

A 「俺、今日真由美に告ろうと思ってたんだ」

B 「え、マジで？」

A 「ずっと前から好きでさ、今日がいいチャンスになると思ったんだよ。振られてもいいんだ。今日がそのケジメになれば、それでいいと思ってた」

B 「：そっか：」

A 「それが二人ともドタキャンなんてな！」

B 「そりゃ、残念だったな」

「ホントはホツとしてる」
 A 「なんでだ」
 B 「俺、昔はメグの方が好きだったんだ」
 A 「どっちだよ」
 B 「本命は真由美だよ。今は真由美が好きなんだ」
 B 「そっか？」
 ガクン、と角度が水平に。
 二人 「…（下を見て、息を飲む）」
 二人 「うおおおおおおおおおおお！」
 コースター、急降下。
 二人の芝居か、カメラを傾ける）
 二人 「うおおおおおおおおお！」
 左に急に曲がる。右に急に曲がる。
 二人の芝居か、カメラを傾ける）
 二人 「うおおおおおおお！」
 コースター、水平回転。
 二人の芝居か、円形ドリー）
 A 「俺……………実はさ……………」
 B 「何……………」
 コースター、きりもみ回転。
 二人の芝居か、カメラ光軸回転）
 A 「俺、実は……………」
 B 「何だよおお……………」
 コースター、逆にきりもみ回転。
 二人の芝居か、カメラ光軸回転）
 コースター、さらに逆にきりもみ三回転。（同）
 B 「真由美とメグと二股かけててー！昨日、ばれたー！だから二人は今日来ねええんだ……………」
 コースター、すごい軌道。
 二人の芝居か、カメラをぶんまわす）
 二人 「うおおおおおおお！」
 ガクン、とジェットコースター終わる。
 二人 「ハア：ハア：ハア：」
 A 「お前、何か言ってたよな？」
 B 「…言ったよ。…一応、言ったからな」
 A 「…何を？」

暗転。

●タイトル『実は#3 皇居ジョギング』

○皇居ジョギングコース

A、ジョギング中。

B、走ってきて、隣に併走しはじめる。
以下、走りながらの芝居。

A 「…(会釈)」

B 「…あの、すいません」

A 「…何ですか」

B 「(小声で)そのまま走ってください」

A 「? いや、ジョギング中…だし…」

B 「分ってます。だから、そのまま走ってください」

A 「…はあ」

B 「(小声で)実は私、追われてるんですよ」

A 「ハイ？」

B 「そのまま走ってください」

A 「…はあ」

B 「実は私、国家機密を盗みまして。で、
追手の狙撃手が私を狙ってるんです」

A 「…なんですかそれ。スパイ的なやつ
ですか？」

B 「(小声で)そのまま走ってください。
詳しくは言えないんです。詳しく言うと、
あなたの命も狙われる」

A 「…ええっと…僕はスナイパーの盾、
みたいなことですか？」

B 「すいません。一般人を彼らは巻き込
めない。それを利用して僕は逃げるつもり
なんです」

A 「はあ」

B 「(芝居がかって)よく走るんですか？」

A 「…まあ」

B 「(小声で)二人が自然にジョギングし
てるフリをしたいんです。そちらは？ と

か聞いてください」
A 「ああ。：そちらは？」
B 「(芝居がかって)そんなでもないです。
まだ初心者なので」
A 「：はあ」
B 「お仕事は何を？」
A 「流通系のサラリーマンです」
B 「：」
A 「：」
B 『そちらは？』
A 「ああ。：そちらは？」
B 「それを聞いたら命を狙われます」
A 「じゃあ聞く意味ないじゃん」
B 「ご結婚は？」
A 「してます。：あ、ええと、そちらは」
B 「それを聞いたら命を狙われます」
A 「何のための会話ですか」
B 「ホラ、ジョギングは会話しながら
丁度いいとか言うし」
A 「まあ、そうですね」
B 「：」
A 「：」
B 「あ」
A 「？」
B 「ここ皇居だった。一周しちゃった
よ！」
B 「二人、立ち止まる。」
A 「もう一周しません？」
B 「やです」

暗転。

●タイトル『実は#4 菌の床』

○菌の温床

A のいる所へ、B が挨拶しに来る。
B 「ちっす！ 先輩ちっす！ この辺で
増えさせてもらいます！」

A 「新入りか」

B 「ハイ！ 黄色ブドウ球菌先輩！ 自分、大腸菌ッス！ 先輩、ここ長いんスカ？」

A 「まあな。ここは適度に湿気があって、栄養も供給されやすい、俺たち菌にとって、理想郷のような場所だ」

B 「マジっすか！ じゃあこの温床こそが、俺のついの住処になるってわけだ！」

A 「そもいかんぞ」

B 「？」

二人、耳をそばだてる。

二人 「嵐が来るぞー！」

A 「あわてる。準備しろ！ 殺されるぞ！」

A、伏せる。

B 「なんですか嵐って！ 先輩、俺恐いッス！ 何が起るんスカ！」

A 「バカ！ 立つな！ 何かにつかまれ！」

B、嵐に飛ばされる。

B 「ああ先輩！ ああああああ！」

B、消える。

A、立ち上がる。

A 「…今回の嵐は強かった…（あたりを見渡して）…かなりの数が殺菌されてしまったな…」

と、Bがまた登場。

B 「ちっす！ パイセンちっす！ この辺で増えさせてもらいます！」

A 「大腸菌！ 生きてたのか！」

B 「？ 他の大腸菌のことッスカ？ 大腸菌ってクローンで増えるんすよ！ だから見た目同じのが、ただ増殖するだけなんス！」

A 「そうなのか」

B 「パイセンここ長いんスカ？ どこ出身スカ？」

A 「網走」

B 「マジっすか！ めっちゃ遠いんすよね？」

A 「そうだ。俺は網走の岬で生まれた。キタキツネの背中、4WDの車、空港の扉。数々の住処を経由して、俺はついにこのシヤングリラに辿りついたのだ」

B 「俺さっき生まれたばっかなので、パイセンの話は参考になります」

二人、耳をそばだてる。

二人 「嵐が来るぞー！ー！ー！」

A、Bをかばって伏せる。

二人 「うわああああああ！」

嵐、過ぎる。

二人、立つ。

A 「良かったな。今回の殺菌の嵐は、抗菌レベルで済んだ」

B 「ところでパイセン、ここはどこッスか？ 菌のパラダイスに見えますが、便器ッスか？」

A 「いや。ここはスマホ」

暗転。

●タイトル『実は#5 睡眠代行いたします』

○オフィス

サラリーマンのA、デスクで居眠りしている。

誰かに起こされる。

A 「ああ、すいません。：ハイ、やります」

仕事にかかるけど、またすぐ居眠り。誰かに起こされる。

A 「あ。：ハイ。：たしかに、寝るのは、俺の一種の才能かも知れないですね。：ハイ、スイマセン。：いえ、開き直ってないです」

○電車の中

A、つり革につかまって居眠り。
と、目を覚ます。

A 「お。あいた。ラッキー」
席に座って、また寝だす。

B (悪魔)、登場。
きよろきよろと辺りをうかがう。
OLの尻を触ったり、スカートめくり
したり。

B 「臭い息。臭い息」
と乗客にハーツとやって嫌がるのを楽
しんでいる。

B 「イヤホン絡ませ」
と、座ってる客のイヤホンを絡ませる。

A、おもむろに起きる。

A 「何やってんの？」
B 「えっ！」
A 「…」
B 「起きてたのか！ お前！」
A 「あれ？ 寝てると思ってたけど…今
日会社で寝すぎたからかな？」
B 「なんだよ！ 寝とけよ！ お前！」
A、周囲を見渡して。
A 「あれ？」
B 「(手でさえぎる) 見なかったことにし
て！ 寝といて！」
A 「なんで周りの人が止まってんの？
(窓の外を見て) …何これ、時間停止？」
B 「ちげーよ！ 悪魔のイタズラだよ！」
A 「悪魔？」
B 「しまった！ 今のなし！ そう、時
間停止！ S F！ S F！ タイムパ
ラドックス！」
A 「お前、悪魔なの？」
B 「ちげーよ！」
A 「悪魔って嘘つきなんだよな？」
B 「そーだよ俺は悪魔だ」
A 「やっぱそっか」
B 「あ。…もう、見なかったことにして

よ！ 人間に目撃されたってばれたら、大
王に怒られちゃうんだから！」
A 「分った。見なかったことにする」
B 「ホッ」
A 「代わりになんかちょうだい」
B 「お前、悪魔に悪魔の取引するたあ、
いい度胸だな！」
A 「じゃいいや。大王とかに報告すれば
いいんでしょ。人間に姿見られたって」
B 「分ったよ！ 分ったよ！ 取引だ！
望みを叶えてやる！」
A 「望み？」
B 「悪魔に何を頼む！」
A 「：とくにないな」
B 「は？」
A 「うーん。しいて言えば、世界が平和
でありますように」
B 「そういうのは神様に言えや！」
A 「そっか」
B 「そっかじゃねえだろ！ あー、なん
か悩みとかねえのか。それを解消してやる
う」
A 「うーん。僕ね、居眠りするのが好き
なのね」
B 「おう」
A 「でね、なるべく眠っていたいのさ。
だけど、仕事もしなくちゃいけないんだ」
B 「で？」
A 「眠ってて、お金を儲ける方法はない
かなあ」
B 「ねえよ！ ；待てよ」
A 「？」
B 「代行の力を授けよう」
A 「？」
B 「睡眠代行だ。誰かの代わりに寝ると、
その人の睡眠を代行できる力。それで金を
稼げばいいんだ。時間いくらってな。寝る
間も惜しいって奴は、いっぱいいるだろ」
A 「いいね」
B 「よし、取引成立」

○翌日、オフィス

同じく、デスクで居眠りするA。
誰かに起こされる。

A 「ああ、スイマセン。：居眠りしちゃ
いました。仕事に戻ります」

ケータイがかかってくる。

席を外すA。

A 「ああ神谷。どう？ スッキリしたか？
：そう。睡眠代行ってホントだったろ？
二時間で、そうだな一万円ってとこか。は
は。いい小遣い稼ぎになった」

○翌日、オフィスの廊下

OLのマイに話しかける。

A 「あ、マイちゃん。こないだ言ってた
チケットゲットしたよ。一緒に行かない？
臨時収入があって：そう、パチンコで勝っ
てさ。：え？ 行かない。：そう。じゃ、
また誘うよ」

ため息をつく。

ケータイがかかってくる。

A 「おう神谷。何？ ：ほう、デカイプ
レゼン。三日徹夜の予定。毎度ありー。う
ん。八時間かける三でいいか？ ：そりゃ、
デカイな。勝ったら億か。会社の居眠りじ
や足りねえから、有給とって寝るわ。うん。
頑張れよ」

○街

A、Bと歩いている。

B 「どうだ、睡眠代行業」

A 「いやあー。儲かっちゃって儲かっちゃ
って。最初二時間一万円にしてたんだけ
ど、社内で噂広まっちゃってさ。値上げし
たら、一時間十万でも、ってなっちゃった」

B 「悪魔め」

A 「寝てるだけでOKだし、最高だよ。
難点は、有給とんなきやいけないぐらいか」
B 「？」
A 「その分寝ないと、起きれなくて」
B 「そりゃそうだ」
A 「こないだなんか、会社で寝て、起き
たら真夜中で誰もいなかったし」
B 「(笑) そりゃ最悪だ」
A 「会社のエースに神谷って同期がいる
んだけどさ。アイツの分寝てやったら、億
単位の仕事取ってきて社長賞さ」
B 「ほう」
A 「会社に貢献。社会に貢献。俺は寝て
るだけ。こんな美味しい取引をありがとう」
B 「喜んでくれて何よりだ。…で、大王
にはくれぐれも」
A 「内緒に決まってんじゃん。ていうか
俺がどうやって大王に…」
と、A、立ち止まる。
A 「あ…」
思わず物陰に隠れるA。
B 「何？」
A B 「…!! …!! …!! (号泣)」
A B 「何だよ。…あの女？」
A 「マイちゃん。俺あの子が好きだった
のに！ 横に歩いてんのが…その、神谷だ
よ。…なんだよ、二人、付き合ってたのか
よ！」
B 「ハッ！ こいつは面白え！ お前が
寝てる間にそいつは出世して、女も奪った
ってことか！ 面白すぎんぞ！」
A、反対方向へ歩き出す。
B 「オイ、どこ行くんだよ！」
A 「ほっといてくれよ！ もうどうでも
いいよ！ 俺、金稼ぐ悪魔になってやる！」

○街

A、通行人に。
A 「睡眠代行いたします！ え？ どう

いうことかって？ 代わりに寝るんです。一時間十万円。嘘じゃないですよ。あなたがその分、寝たことになるんです。ハイ。もしそうじゃなかったらお代は返します。後払いでも構いません」

A 「睡眠代行いたします！」

×

A 「どなたか、代わりに寝て欲しい人、

いるでしょ？」

×

A、札束を数えている。

A 「：まだまだ足りない。もっと寝てねえ業界ねえかな。ブラック企業に行くか。

：そうだ！ 映画の撮影現場だ！」

長い暗転。

長い明転。

○Aの部屋

A、布団に寝ている。

枕元に悪魔が正座している。

A、目を覚ます。

A 「(以下老人の声で) あれ? : :」

大きなあくびをして、伸び。

A 「ああー。だいぶ、寝たなあー。これで随分儲かっただろ : :」

起き上がろうとするが、腰が痛く、ゆっくりとしか動けない。

A 「なんだこれ : : ? 体がなまってるのか? : : 動かねえ : : それに、声も変だ。まるで老人のような : :」

そこでようやく悪魔に気づく。

A 「うわ! お前、いたのか!」

B 「今日は、本当の悪魔の仕事をしにきたぜ」

A 「?」

B 「実は、今日がお前の寿命の日だ」

A 「はああ?」

鏡を見る。

A 「なんだこれ！ ジジイじゃねえか！」
B 「今は二〇七六年。お前は六十年寝て、今日が九十歳の誕生日で、命日」

A 「はあああああ？」
B 「じゃ、死ね」
立ち上がる。

A 「待ってくれよ！ 待ってくれよ！
どうして俺が死ななきゃいけないんだ！」

B 「寿命だから。お前は寿命まで寝て過
ごすことを選んだんだろ？」

A 「なんだよ！ そんなの聞いてない
よ！」

B 「…一々うるせえなあ。魂の緒、切る
よ」

A 「待って！ だ、大王に言うぞ」

B 「何を？」

A 「お前が人間に見られたってことを
さ！」

B 「あ…いや、それはちよっと勘弁して
ください。あれはお前が寝てると思つてて
…」

A 「その場に、連れてつてくれよ」

B 「？」

A 「その場に連れてつてくれよ。あの、
出合いの場に」

B 「…仕方ねえなあ」

○電車の中

寝てる過去のAを見てる二人。

B 「な？ お前、寝てるように見えるだ
ろ？」

A 「いや。寝てた。このあと起きた」

B 「なんだ、やっぱり寝てたのか」

と、A、ツカツカと歩き、過去のAの
頭をはたく。

B 「何やってんだよ！ そんなことした
らお前が起きて…あ！ 過去の俺が、お前
が起きてるのに気づいて…ああ！ 俺とお
前は出会わなかったじゃん！ 時系列が変

わっちまうだろ！ どうしてくれるんだ
よ！ ああどうしよう…」

AとBに当たるライトが、ゆっくり消
えていく。

A 「ああ。未来の俺たちは、消滅するの
か」

B 「そうだよバカ！」

A 「…そうか…」

奥へ消えようとする二人。

もう一度過去のAをはたくA。

A 「起きろ、俺」

暗転。

● エンディング